

第1回アクティブ・ラーニング研修会実践報告

日 時 平成29年6月7日（水）
場 所 多治見高校 桔梗会館
参加者 本校職員及び各務原西高校、大垣南高校
中津高校、斐太高校より合計9名の先生
講 師 京都大学大学院准教授 石井英真 先生
テーマ パフォーマンス評価とルーブリックの基本的な
考え方



実践・講義内容

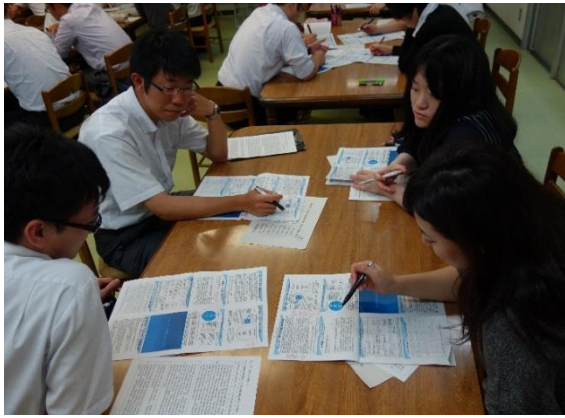
今回の講演では、「『パフォーマンス評価』とは何のために用いられるものか」、「どう評価するのか」の二点を中心にお話しいただいた。

パフォーマンス評価とは、学習者の振る舞いや作品（パフォーマンス）を手がかりに、総合的な活用力を質的に評価する方法である。これは、生徒がアクティブ・ラーニングに代表されるような「豊かに考える授業」をしていながら、教師の評価では知識や技能（見えやすい学力）しか問わないといったミスマッチを解消する手立てとなる。

「アクティブ・ラーニング」と「パフォーマンス評価」はどちらも次期学習指導要領改訂におけるキーワードであるが、これは21世紀型の学力観「資質、能力」を「育成し」、「評価する」ものであり、コンピテンシー・ベース（「何ができるようになるか」）を重視するカリキュラムを目指した高大接続改革の中に位置づけられる。

このような、新しい「資質、能力」が強調される背景には、これからの生徒が生きていく社会は、転職を前提で就職したり、複数の職を掛け持ちしたりするといった就職事情や、その中で、お互いに「ゆるいつながり」を形成しながら、納得解・最適解を創り上げなければいけない変動の激しい社会になるだろうという予測がある。これまでの社会では、物づくりのように、熟練の技術が一方向的に伝授され、そのために人と人の強いつながりが求められてきた。しかし、これからの社会では、人材はAIに置き換え可能と捉えられ、「人を育てる」という意識が薄くなっていくだろう。そのような社会で求められるのは、複数の人と緩いコミュニティを築きながら、協働を通してアイデアを生む能力である。

そこで、「正解のない問題」に対応するための、生涯にわたって学び続けるといった姿勢や、高度な知的・社会的能力が必要とされる。



学校においては「思考する力」「判断する力」といったように、「活動する」ことでしか身につけられない力の習得を図りたい。そのためには、学校外や将来の生活で遭遇する「本物の活動」をする必要がある。つまり、単に教材研究した結果を生徒に説明するのではなく、その教科の一番の面白さでもある、教材研究の「プロセス」を生徒に追わせるような活動が有効である。

続いて、講演では「質的に評価する」ことを理解するために、三題の算数の問題でそれぞれ何の力が測られているかをグループごとに考察した。

問題は、一見難易度が上がっていく計算問題に見えたが、それぞれ、計算する力（できる）、意味理解（わかる）、知識の総合的活用力（わかる）が問われており、順に学力の質的レベルが高くなるように設定されていた。

その上で、授業では、二段階目の「わかる」段階をゴールに設定し、仮に授業中完全に理解できなくても、分かった感の残る「半分かり」の状態を継続して創り上げることで、いつか「分かった」と腹に落ちることが期待できる。このように、生徒が知識の理解を図りつつ、満足せず自ら学習する姿勢につながることを学んだ。

そしてそれらで培った力を評価する方法が、「ルーブリック」である。ルーブリックでは、部分点の積み上げによって評価するのではなく、思考のプロセスを見て「質的に」評価することが必要である。講義では、グループによる二回目の活動において、五つの英文を「レベルの高い順」に並び替え、「質的に評価する」ことを体験した。結果、英文の内容面を重視するのか、文法の正確さを重視するのかによって解釈は異なり、評価基準は「重視するもの」によって差が生じることを確認した。

このように、ルーブリックは、教師が判断するしかないような、「概念を理解しているか」や「方略を適用できるか」といった部分を測るのに適している。よって少々曖昧であっても、解釈が分かり、観点の軸がしっかりしたものであれば良い。見方を変えれば、教師の見る目を鍛えることが大切であるといえる。

今回の講義を受けて、今までアクティブ・ラーニング型の授業により、「能力を身につけさせる」活動面にばかり目が向き、それらが実際に身につけているのか「評価する」ことまでできていないということに気づかされた。ルーブリックを作ることは容易ではないが、「評価」を通して活動を振り返り、改善してこそよりよい方法を探ることができると考えられるため、講義で得た知識を参考に年内中に各教科でルーブリックを完成せたい。